

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アムール川流域の資源と先住民族の経済： 北方先住民の現在と文化伝承・生態系 IV

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4875

アムール川流域の資源と先住民族の経済

佐々木史郎

アムール川流域の先住民はクロテンの毛皮などの希少価値を持った資源を戦略的に利用して、中国、ロシアなどの国家経済に参入してきた。その歴史を十九世紀から二十一世紀の今日までたどりながら、先住民たちの二十一世紀の状況と将来を展望してみる。

はじめに

アムール川（黒竜江）は全長四四四四キロメートル、流域面積二〇五万一五〇〇キロメートルで、長さでは世界で八位、流域面積では十位の大河である。そこには自然の恵みがあふれ、古来より多くの人々がその恵みに依拠して豊かな暮らしをしてきた。その恵みは、単に地元の人々（現在の「先住民族」¹）の祖先たち、その分布は図を参照）の自家消費用の食料や生活材を豊かにしただけでなく、アムール川流域に隣

ささき・しろう — 一九五七年生まれ。国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学教授、文化人類学、シベリア民族学専攻。現在はシベリア、極東ロシアの先住民族の環境適応に関する諸問題とその近代史に関する問題に取り組んでいる。著書に『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』（日本放送出版協会、一九九六）、共編著に『東アジア内海世界の交流史——周辺地域における社会制度の形成』（人文書院、二〇〇八）などがある。

接する他の地域（中国東北地方や華北地域、モンゴル高原、シベリア、朝鮮半島、日本列島）の人々の生活や中国、韓国・朝鮮、日本、ロシアといった国々の経済も潤した。そこから産出される付加価値の高い希少な産物が、この地域と周辺地域との政治的、経済的、文化的な交流を活発にしたからである。例えばクロテン、ギンギツネ、ヤマネコ、ラッコなどに代表される毛皮類、矢羽根とされたワシ・タカ類の尾羽、高価な薬の原料とされたチョウセンニンジンやクマの干した胆嚢（熊胆）などである。これらの産物は、周辺の国々の王族や貴族、高級官僚や商人たちの欲望をかき立て、それらを産出する地域の人々と国家との関係を緊密化し、交流を促進し、その結果人々の生活を豊かにし、さまざまな文化を開花させた。

そのような関係や交流は、すでに東アジアに国家が出現し

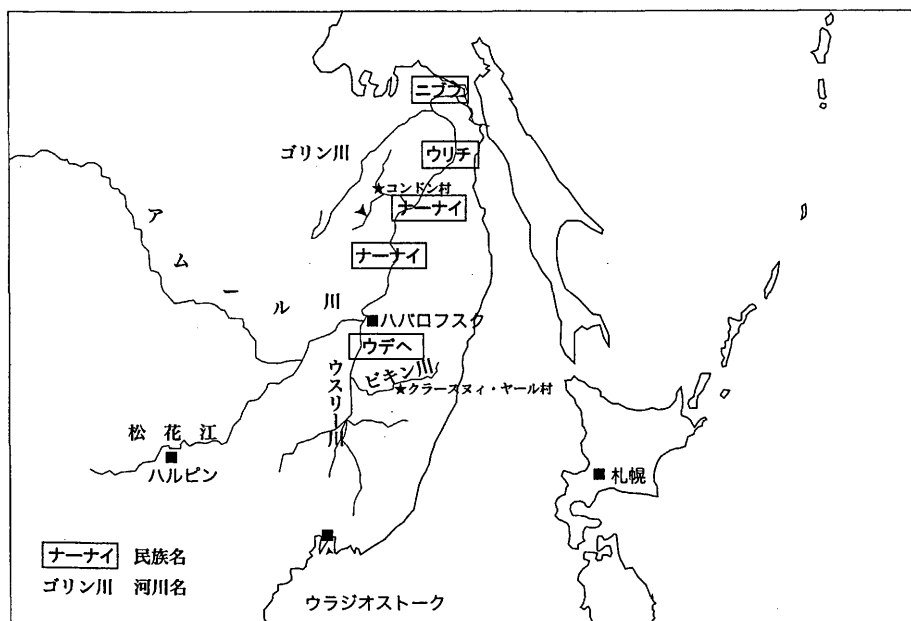


図 ロシア極東地域の先住民族

始めた時代から始まっていたが、本稿ではその長い交流史の中から、近代到来直前の時代から現在までという時間の流れを取り上げる。それは、この期間がアムール川流域を支配した国家の体制が何度も大きく変わった激動の時代だからである。この地域の人々は十九世紀中期から現在までの一五〇年あまりの間に、国家体制の劇的な転換を三回経験した。すなわち、中華王朝だった清朝の支配から帝国主義的な帝政ロシアの支配への転換、一九一七年のロシア革命による社会主義体制への転換、そして一九九一年のソ連崩壊による社会主義体制から自由主義体制への転換である。本稿ではこれら三つの転換期を挟んだ、異なる四種類の政治経済体制の下で、アムール川流域の「先住民族」の祖先たちがどのような資源利用戦略を選んできたのかを明らかにする。それによつて、彼らの社会と文化の栄枯盛衰の過程と原因を明らかにするとともに、これまで彼らに貼られてきた「未開の狩猟採集民族」というレッテルを引き剥がしていきたい。

ただし、本論に入る前にこの地域の有用資源について概観しておこう。

アムール川流域地方の資源

アムール川とそこに流れ込む支流の流域は周囲が豊かな混

交林（針葉樹と広葉樹が混じる森）で覆われ、自然の恵みがあふれていた。緯度の上では北緯四十三度から五十三度程度でそれほど北に位置するわけではないが、ユーラシア大陸の東に位置し、季節風の影響が大きい。夏には南東からの湿った暖かい空気が入るために、高温多湿となり、冬は内陸からの乾いた冷たい北西の風が吹き寄せるために、極度に寒冷になる。すなわち、春から夏にかけては温帯となり、秋から冬には寒帯となる。したがって、ここは温帯と寒帯の動植物が入り交じることになる。

森林資源

例えば森の大型の動物で見れば、シカ類の場合、ヘラジカやジャコウジカのような寒帯、亜寒帯のシカと、アカシカ、ノロジカ、ニホンジカのような温帯のシカが共存する。クマも亜寒帯性のヒグマと温帯性のツキノワグマとが共存し、そのほか、寒帯性のタイリクオオカミと温帯性のアムールトラ、アムールヒョウ、ヤマネコ、イノシシなどが一定の棲み分けを示しつつも地域全体としては共存している。中型、小型の動物では、ネズミ、リスなどの齧歯類やウサギ類も豊富で、それらをえさとするクロテン、テン、カワウソ、キツネ、イタチ、オコジョ、タヌキ、アナグマ、クズリなどの高価な毛皮がとれる動物が多数生息する。これらの毛皮が取れる動物

は、この地域が歴史文献に登場するようになって以来、この地域の経済だけでなく、周辺の国家の経済をも支えてきた最も重要な資源だった。

植物で資源として利用可能なものも豊富である。コケモモ、クロマメノキ、ツルコケモモ、ハマナス、エゾノウワミズザクラなどのベリイ類の他、チョウセンゴヨウ、クルミ、クリ、ナラのような堅果類、ギョウジャニンニク、ヨモギ、イラクサのような草本の葉も食用とされた。薬用の植物も豊富であり、チョウセンニンジンだけでなく、エゾウコギ、クサノオウ、コケモモ、ハマナス、チョウセンゴミシなどの根や茎も、細かく砕いて服用したり、煎じてその汁を飲む形で薬用とされた。

木本類は建築部材や道具類の材料とされた。チョウセンゴヨウやモミ、カラマツなどの針葉樹は幹がまっすぐ伸びることから家の建築部材とされ、シラカバ、トネリコ、ボダイジュなどの広葉樹で堅い素材が取れるものは器やナイフの柄などの道具類に活用された。現在建材として高く売れるのはチョウセンゴヨウであり、その乱開発が問題になっている。

たやすくしかも大量に確保できるシラカバの樹皮は、その可塑性の高さも相まって、大きさも用途も異なるさまざまなものに使われた。容器、バケツ、ひしゃく、箱、笠、家の壁、

防水シート、カヌーなどである。シラカバは森を伐採したあとに形成される二次林を構成する主要な樹種であり、寒帯、亜寒帯地域に広く分布する。そのためにその樹皮を多用する文化も、アムール川流域だけでなく、北半球の寒冷地方全体に広く分布している。

水産資源

川も魚にあふれている。この地域の代表的な魚は遼河性のサケ・マス類である。その中でも量的に最も重要なのはシロザケとカラフトマスである。前者はアムール川を代表する魚で、この地域の人々の食料と経済の根幹を支えてきた。産卵期になるとオスの鼻先が曲がってくるのが特徴である。シロザケの産卵地はアムール川の中流域、上流域の支流にあり、松花江（スンガリー川）やウスリー川（烏蘇里江）の支流域にも及ぶ。かつて現在の先住諸民族の祖先しかこの地域にいなかった時代（先史時代〜十九世紀中期まで）には、シロザケの遼上によって大河アムールの川面が盛り上がりつつ見えたとはいくらい大量に上ってきたようで、ウスリー川支流のビキン川やイマン川流域にいたウデヘ民族も上ってくるシロザケを捕って一年分の保存食を作ったといわれる。現在は大量の移民が入ったことで捕獲者が大幅に増えたことと、河口付近で採卵目的に多くを捕獲するために、ハバロフスクより上流に

まで上るものは少なくなってしまった。しかし、近年では各地の川でサケを呼び戻す運動が行われ、ビキン川でも卵をふ化させてシロザケを呼び戻す活動が始まっている。

長旅をするシロザケに対してカラフトマスの遼上距離は短い。日本海、オホーツク海に注ぐ中小河川で産卵することが多い。そのために、アムール川では河口に近いところに注ぐ支流やタタール海峡（間宮海峡）に面した地域の河川、そしてサハリン（樺太）の河川でよく取れる。産卵期となると背中にこぶのような盛り上がりができる。

そのほか遼河性の魚ではサクラマスやマスノスケなども見られるが量は少ない。

陸封性の魚で、この地域の経済にとって重要だったのはチョウザメである。アムール川にはロシア語でオシオートルとカルーガ（和名ではダウリヤチョウザメ）と呼ばれる二種類が生息する。前者は体長一〜二メートル、重さ数十キログラム程度だが、後者は体長四メートル重さ数百キログラムにまで成長する。両者ともアムール川の中下流域に生息するが、ことに最下流にいたニヴフの間でチョウザメ漁が重要だった。彼らはチョウザメの卵巣（キャビア）を目当てに捕獲していたわけではなく、肉を食用にし、軟骨でできた背骨を中国人商人に売っていた。干した背骨の軟骨は水で戻してから、高

級中華料理の材料とされたのである。

その他、アムール川とその支流からなる水系ではコイ、フナ、ナマズ、カワカマス、レノーク（コクチマスに似た魚）、シーク（ウスリースロザケ）、タルスタロービツク（ハクレン）、アウハ（ケツギョ）、コーリュシユカ（キュウリウオ）、チェバークなどが取れる。その大半は自家消費用であるが、フナは一部の地域で商業的な捕獲が行われてきた。それは、一定量の安定した漁獲が望めたことと、品質が高かったからである。

この地域では海の魚の利用は少ない。陸の见えない沖合に乗り出して建網や巻き網、底引き網などで大量に捕獲する技術がなかったからである。しかし、それでも海岸近くに暮らす人々は、沿岸に刺し網、地引き網、釣りで、タラ、ヒラメ、カレイなどの海の魚を捕って食用としていた。しかし、海の資源で重要だったのはアザラシ類、クジラ類などの海棲哺乳類（海獣類）である。これらの動物は大型で大量の肉や毛皮を得ることができ、その脂は食用となるだけでなく、灯明としても使えた。アムール川河口周辺の海岸地帯やサハリン東海岸ではこの海獣狩猟がことに盛んだった。

国家との交流と先住民の経済

前近代国家による支配と住民の生産活動

アムール川流域はシベリア、モンゴル高原、中国東北地方、朝鮮半島、日本列島と隣接する。そして、これらの隣接地域には国家が興亡した。中国には灌漑農耕を生産基盤とした巨大国家が誕生し、独自の「文明」が生まれた。乾燥した草原地帯が続くモンゴル高原には遊牧を生産基盤にした国家が誕生し、機動的な軍隊を活用して広大な領域を支配する遊牧帝国が興亡を繰り返した。中国東北地方、朝鮮半島、日本列島には小中華というような中国を模倣した国家が誕生したが、それぞれ政治経済的に独自のシステムを整え、中華国家とも遊牧国家とも一線を画す独立国家に成長した。これらの地域に中国とは異なる、独自色を前面に打ち出した国家がそろそろようになるのは十く十一世紀ぐらいからである。

そのような状況の中でアムール川流域ではその住民による独自の国家形成は見られなかった。しかし、アムール川の水系を利用した物資の往来は活発であり、この地域はモンゴル高原の内陸文化とサハリンや北海道に代表される沿岸海洋文化、中国に由来する農耕文化とシベリアの森林狩猟採集文化とが行き交う、文化・文明の十字路だった。ここを行き交

う物資の流れを押さえれば大きな富を得ることができたため、多くの国々がこの地域の領有、あるいは交易路の支配を目指して覇を競った。

まず、ここの交易路をおさえたのは女真の金王朝（一二二七～一二三四年）である。ついでそれを滅ぼしたモンゴルの元王朝（一二七〇～一三六八年）が支配し、アムールのツングース系の人々の祖先だけでなく、サハリンのニヴフやアイヌの祖先までもその統制下に加えた。続いてモンゴルを中国から追放した漢民族の明王朝（一三六八～一六四四年）が支配した。これらの国家は、この地域で産出されるクロテン、キツネ、オコジョの毛皮やこの地域を通じて得られるラッコの毛皮など、宮廷で皇族や上級官僚に使われる高級毛皮を求めたのである。しかし、これらの王朝の実質的な支配は短期間だった。それに対して実効支配を百年以上にわたって続けたのは、女真の後裔である満洲の清王朝（一六一六～一九一二年）と、そこからアムール川流域を奪取したロシアだった。清はその成立期から徐々に領域を北に拡大し、一六八九年のネルチンスク条約でシベリアから南下してきた帝政ロシアの勢力を押さえ、一八六〇年の北京条約でアムール川とウスリー川を国境とされるまで、この地域を支配した。帝政ロシアはその後ソ連、ロシア連邦と国家形態は変わるが、一八

六〇年に形成された国境を維持し、今日までこの地域を領有している。

清とロシアの支配は、今日のアムール川流域の先住諸民族の人々の生産基盤、経済形態、そして資源利用のあり方に決定的な影響を及ぼした。

清はアムール川流域をクロテンの毛皮の供給地であるとともに、対ロシア防衛線として位置づけていた。それは清とロシアが武力衝突を起こしたとき、地元住民が清側について戦い、ともに血を流したことに関係しているだろう。そのような意義は時代が下るとともに薄れるが、清はクロテンを確保するためにこの地域の住民を優遇した。すなわち、氏族や村の有力者に満洲貴族に匹敵する地位と待遇を与え、クロテンを貢納したものに、絹織物や綿織物などからなる大量の恩賞を支給した。

清のクロテンを対象とする毛皮貢納制度はこの地域の住民の経済、社会、文化に計り知れない影響をもたらした。クロテンは人々に富をもたらす産物となり、人々の生活がクロテン猟を中心にして回るようになった（写真）。また、クロテンだけでなく、ヤマネコ、カワウソ、キツネ、テン、イタチ、リスなどの動物の毛皮も、高い値段で中国内地から来る商人たちに売ることができたことから、生産活動における毛皮獣



写真1 王朝時代から行われたクロテンの網猟

狩猟の比重が高まった。十八、十九世紀のアムール川の住民の狩猟の実態を詳細に記述した記録はないが、現代の先住諸民族の一九三〇年代ぐらいまで維持されていた「伝統的」な生業層によれば、秋から冬にかけての猟期は毛皮獣猟を中心

に構成されている。たとえば、現在のロシア沿海地方のウスリー川に注ぐ支流の一つであるビキン川の沿岸に暮らしていたウデヘの場合、すでに春、夏の間からわなの仕掛けを用意しておく。秋口に入るとちょうどアカシカの発情期と重なるために、シカ笛（シラカバ樹皮をラップパ状に整形したもの）を利用したアカシカ猟を行って肉を確保する。ついで本格的に猟場に入り、まず猟小屋の近くの小川に網を下ろして魚を捕って十分な食料を確保し、それから本格的なわなの設営に入る。設営後はわなを見回りながら他の大型動物（アカシカ、ノロジカ、イノシシなど）の足跡や気配にも十分気を配りながら猟場を歩く。

クロテンの毛皮の貢納に対する恩賞品と、中国商人との交易で得られる品物は、アムール川の住民の間で消費されるだけでなく、サハリン（樺太）を経て日本列島までもたらされた。アムールの人々の一部は海峡を越えてサハリンに渡り、それを南下して、南端に設けられた日本側の出張所（一七九〇年に松前藩が設けた白土会所、後に幕府が直轄する）まで出て、中国から仕入れた絹織物、綿織物、ワシ・タカの尾羽などを日本側に売り、毛皮、鉄製品などを仕入れた。この取引は日本側の意向で、サハリン産クロテンを基準に価格が定められたが、中国製品と毛皮との交換比率が中国側に比べ

てはるかに有利だったため、日本との取引と中国との取引を繰り返すと、莫大な利益を手にすることができた（詳しくは佐々木史郎『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会、一九九六と佐々木史郎「サンタン交易の経済学」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、二〇一一を参照）。そして、中国と日本との仲介交易で得た富を、彼らが宝物と見なす品物で貯蓄した。例えばヤマネコの毛皮の外套、古い満洲製の鎧、クジラの髭を張った弓、銀で象眼した槍の穂先、日本製の大型鉄鍋などである。そのようなものを所有することで、社会的名誉も手にすることができたのである。

近代国家による支配と少数民族経済

アムール川流域の大半が帝政ロシアの領土とされて以降も、この地域の住民の社会、経済におけるクロテンの重要性は変わらなかった。ただし、取引相手が清朝政府からロシア商人や中国商人となつて、彼らにとつて不利な取引を強いられるようになったことは否めなかった。そして、満洲鎧や日本製の鉄鍋のような、彼らが財産として後生大事に保管してきたものが、価値基準の転換のためにただのがらくたと化した。それによつて、清の社会では富裕階層だったものが、ロシア社会では一転貧困階層とされてしまった。また、清朝政府が

彼らを特権階級として遇したのに対して、帝政ロシアは異教、未開の「少数民族」、すなわちロシア社会の最底辺の人々と定義した。社会的地域の急落と経済状態が相乗効果を起こしたのである。

帝政ロシア時代の初期資本主義的な経済政策は、この地域の森林資源の劣化を招いた。

クロテンは過剰狩猟のために数を減らして絶滅の危機に瀕するようになった。清朝支配時代もおそらくかなりの数のクロテンが捕られたはずだが、クロテンは基本的に皇族が高級官僚が身につけるものだったために、質の高さが求められ、おそらくそれによつて捕獲数に事実上の抑制が働いたと考えられる。しかし、帝政時代の初期資本主義では質よりも量が求められ、さらに銃器やバネ式のわななど、強力で、短時間に多数の動物を捕獲することを可能にする狩猟用具が導入され、森に入る猟師の数も格段に増えた。アムール川の魚でもとりわけサケ・マス類とチョウザメが商業漁業の対象とされたために、これまた急速に数を減らした。この時代の資源の急速な劣化は基本的に開発圧によるものである。帝政ロシアにとつてこの地域は資源を搾取するための土地であつて、その政策にはまだ資源の管理、保護あるいは持続的利用といった観点がなかった。

そのような状況は革命によって成立したソ連の社会主義政策が始まることで徐々に変わっていく。

社会主義政権最初期の一九二〇年代には理想主義的な政策が採用され、帝政時代に貧困化した「少数民族」と定義された住民の生活改善と福利厚生がはかられ、学校教育制度、医療施設、村落インフラの整備などが進められた。しかし、スターリンが権力を掌握する一九三〇年代に入ると、少数民族をも計画経済の一部に巻き込む政策が採用され、彼らを農民化して、集団農場を結成させ、穀物生産に従事させようとした。しかし、アムール川流域の「少数民族」の居住地ではその試みの多くが失敗する。漁業、狩猟業に長年従事し、そのための文化を築いてきた彼らには、菜園でジャガイモや野菜類を育て、少数のウシやブタを飼うくらいのことではできなかったが、コンバインを使った大規模穀物栽培や多数の家畜を飼う大規模な畜産はできなかった（A・F・スタルツェフ（森本和男訳）『ウデへの狩猟活動と狩猟習俗』佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』慶友社、一九九八、二〇九―二五四頁）。

彼らを農民化あるいは農業労働者化することに失敗したソ連政府は、彼らの得意な分野をのばして社会主義経済に貢献させる政策に転換した。それがサケ・マス漁を中心とした漁業と毛皮生産のための狩猟業の振興だった。そのためにソ連

政府は漁業資源や毛皮獣資源の探査を行い、その量を正確に把握するよう努めた。サケ・マスの場合には漁獲を免許制にして、漁業組合を通じて漁師に発給した。絶滅間近まで数が減ったクロテンに関してはその増殖を図って、質の高いクロテンをアムール川上流方面やヤクーチア（現在のロシア連邦サハ共和国）から導入してアムール川下流域の森に放ち、捕獲数の厳しい管理を行って資源を回復させた。また、その他の動物も種ごとに免許を発給して捕獲数の管理を行った。

この政策は当たった。漁業や狩猟業はもともと彼らが得意としていた産業であり、そこに漁業ならば丈夫なナイロン糸の漁網、狩猟業ならば小型化したバネ式のわなと高性能のライフル銃や散弾銃、そして移動手段に船外機付きのボートやスノーモービル、トラック、乗用車を導入してやることで、生産効率を大きく改善させた。しかも彼らが計画に則って生産する産物、すなわち、魚、毛皮、獣肉、その他森林産品は、政府が規定の価格で買い上げ、さらに一部の産物は自由市場で個人的にも売れた。思想的あるいは社会制度的には政府の厳しい管理下にありながらも、「少数民族」たちの経済状態は帝政時代と比べものにならないほど改善した。

都市計画に準拠した村が建設され、そこに耐久性のあるログハウスが建てられて、人々は基本的に一年中村で生活する

ことになった。その村には電気と電話が完備され、暖房や厨房で使われる薪は村の行政組織や生産組織（漁業組合や国営の森林企業など）が村人に安価に供給し、子供たちには学校教育が用意され、無料の医療体制が設けられ、村人の娯楽のための公民館（クラブ）も建てられた。個々の設備や装備の技術水準は決して高いとはいえなかったが、一応都市生活で必要された施設、設備が少数民族の村にも完備されるようになった。

集住村落で暮らすようになり、猟師や漁師はその仕事場が生活の場から切り離されることになった。しかし、その欠点は船外機付きボート、スノーモービル、自動車を導入、普及させることで補った。アムール川流域でもこのいわゆる「モーターゼーション」は一九六〇年代に始まり、七〇年代に改善された。そして、八〇年代にはもはやこのような交通輸送手段なしには生産も生活もできない状態になった。社会主義政府は、モスクワから見れば遠隔地である極東のアムール川流域の少数民族の地域まで、燃料となるガソリンやメンテナンス用の部品を公定価格で供給したのである。それはおそらく政府にとっては採算度外視の政策だったと思われるが、この政策によって猟師や漁師たちは安心して生産に従事し、政府が定めた計画を達成することができた。このような状況

は一九八〇年代末まで続く。一九九〇年代や二〇〇〇年代になって人々が過去を振り返るとき、生活の安定という観点から最もノスタルジックに回顧するのは一九七〇年代から八〇年代前半の時代である。

ポスト社会主義時代の先住民族経済

一九九一年暮れにソ連は崩壊し、翌九二年にはかつての連邦構成共和国が真の独立国となった。旧ソ連の資産、権利、権限の多くは、これらの新生独立国家の中で最大最強だったロシア連邦に受け継がれたが、そのロシアは社会主義的な経済政策を放棄し、いきなりアメリカ的な市場経済への移行を図った。それが大混乱を引き起こし、経済が崩壊して一九九〇年代には何度も危機に見舞われたことは記憶に新しい。その経済危機は即座に極東にも波及し、アムール川流域の「少数民族」(ソ連崩壊後は「先住民族」と呼ばれることが多い)をも直撃した。具体的には、それまで安価に供給されていたガソリンやモーター類の部品の価格が高騰し、魚や毛皮類などの彼らの生産物の価格が暴落した。一九八〇年代末まで、旧ソ連は市場での動向を無視した価格操作を行って、遠隔地の先住民族たちの経済を支えていたが、その支えがなくなったのである。

さらに、先住民たちが所属していた生産組織、すなわち、

漁業組合や森林組合、あるいは国営企業が解散され、それらが保有していた資産や権利はその構成員たちに分配されて民営化が図られた。しかし、七十年にわたって国に保護されてきた人々はその資産や権利の保有、行使の仕方を知らなかった。そのために、目先の利く一部の起業家に買い占められ、先住民の多くは目の前にある祖先伝来の漁場や猟場の権利を失う結果となった。ロシア政府は、彼らの権利がある程度保護するために、一定量の漁獲が可能な無料の免許を発行する制度を導入した³。しかし、そこで認められた量では直接食べても、あるいは加工して販売しても、とても生活できる収入にはならなかった。再びアムールの人々の貧困化が始まった。

毛皮の場合には市場原理に基づく価格決定が直接影響し、価格が暴落した。欧米における野生動物保護運動と反毛皮キャンペーン、さらに化学繊維を用いた毛皮に代わる防寒素材、ファッション素材の急速な発達と普及によって、欧米での需要が低下していたのである。そして、それに伴ってロシア市場で毛皮取引業者どうしが激しく競争するようになり、毛皮価格は低めに押さえられてしまった。

それに対して、ガソリンや部品は生産地から遠いために輸送費がかさみ、そこに需要の増大も重なって、モスクワから離れるほど高くなった。このような状況下で、毛皮獣狩猟を

生産の柱とした先住民族系の組合や国営企業の多くが破産した。職を失った元猟師たちの中には、密猟と闇経済への繋がりに活路を求めるものさえいた。しかし、そのような状況の中でしぶとく生き残った先住民族系の企業もあった。それは沿海地方のウスリー川に注ぐ支流の一つであるビキン川流域のウデへの狩猟企業と、アムール川下流域に注ぐ支流の一つであるグリーン川流域のナーナイの漁業組合である。この両者にはそれぞれ地理的な有利さと特色ある生産物を持っていた。地理的には、両者ともウラジオストーク、ハバロフスクといった極東の大都市から遠からず近からずの位置にあった。すなわち、車で七〜八時間の距離だったのである。時間はもつとかかるが列車とバスを乗り継いで行くこともできた。この距離は気楽に行けるものではないが、かといつてものを運ぶのにそれほど不利でもない。そのためにこの両村の森に開発業者の手が伸びるのに時間がかかった一方で、地元住民の産物を取引する業者はひっきりなしに往来した。

産物についていえば、ビキン川のウデへの森はソ連時代のクロテン資源の回復政策によって再びクロテンの宝庫となっていた(写真2)。ソ連時代クロテンの毛皮は西側世界に輸出できて外貨を稼げる産物で、政府は厳しい管理下に置くとともに、それを生産する地元企業を優遇した。ソ連崩壊後は



写真2 現代のクロテン猟



写真3 コンドン村の人びとによるフナ漁

ロシア通貨（ルーブル）の下落によって、ドル建ての価格は暴落したが、それでもクロテンだけは価格が回復し、二〇〇〇年代以降は再び毛皮の王者として、ロシアだけでなく世界の毛皮市場で高値を呼んでいる。ビキン川流域のウデヘたちは一九九〇年代に起きた森林開発を巡る沿海地方政府との対立を克服し、ソ連時代の国営狩猟林業企業を株式会社として民営化して、厳密に区画した林業区域で木材を生産して稼ぎ、その利益で毛皮獣狩猟や漁業をはじめとする伝統的な産業を

守ったのである。

もう一つの成功例であるゴリン川のナーナイの例では、近くの湖と川で捕れるフナ（特に冬の寒ブナ）が、質の高さと汚染されていないという点でブランド化し、ロシア国内で比較的良好な価格で取引されてきたことで、旧ソ連時代以来の漁業組合が未だに操業を続けている（写真3）。この地域でも広大な森が狩猟組合の猟場として指定され、厳しい資源管理の下に狩猟も行われている。

両者に共通するのは、一九九〇年代のエリツイン時代に対先住民族政策の一環として制定された「伝統的自然利用領域」という制度を活用し、先祖伝来の狩猟場や漁場を自分たち専用の土地として確保したことである。この制度はどの先住民族地域でもうまく活用されたわけではない。ハバロフスク地方では独自の法律でこの制度を法制化したのが、それでも先住民族自身がこれを活用する前に漁場や猟場を先住民族以外の企業や、場合によっては外資に切り売りされてしまつて、十分な面積を確保できなかったという例が多数ある。ビキン川とゴリン川の事例は、例外的と言つていいほど状況に恵まれ、広大な面積の森と河川を「伝統的自然利用領域」に指定することができ、伝統的な産業専用の土地として確保することに成功したのである。

しかし、それでも問題は山積している。最も深刻なのは過疎と狩猟、漁業の後継者不足と、長年にわたつて培つてきた伝統文化と固有言語の継承者の不在である。若者は厳しい修行を必要とする伝統的な狩猟や漁業に関心を持たず、固有の文化や言語を学ぶより、情報技術やロシア語、英語を勉強する方に興味を覚える。そして、より高い収入と快適な生活を求めてハバロフスクやウラジオストークといった都市へと流出する。村に残されているのは学校を終えていない子供と、

引退して年金で暮らす老人である。したがつて、伝統的な生産活動や産業を保持しても、それを支える青壮年世代がいないのである。それを改善するには、村の産業で得られた利益を住環境や情報機器、そして流通システムの整備に投資し、若者が村に残る方が快適な暮らしができると思ふような環境を整えていくことが必要だろう。

おわりに——経済成長の恩恵はどこへ？

以上、前近代的な東アジアの王朝が支配していた時代からポスト社会主義の国家が支配する時代まで、アムール川下流域の住民、とりわけ現在「先住民族」と呼ばれる住民の資源利用と経済状態を時代ごとに概観した。アムール川下流域にはまだ水産資源、森林資源に十分な余力が残されており、またそこに暮らす人々にもその資源を慎重に管理しながら持続的に利用しようとする意志があるために、この地域が急速に不毛の大地と化すことは考えられない。また、先住民族を立ち退かせて開発を進めようという政策がとられることもまずあり得ない。

しかし、石油、天然ガス、そして今日注目されている希少金属や希土類が発見されると問題は別になる。石油・天然ガス資源が発見され、開発が急ピッチで進められたサハリン東

海岸は先住民たちはその開発によって先祖伝来の漁場やトナカイ放牧地が使えなくなる事態に直面した。先住民族が経営する企業が生き残っているビギン川流域やゴリン川流域では、エネルギー資源が発見されていないことがその先住民族にとって幸いしているともいえる。

エネルギー資源を輸出することで得られているロシアの経済力は、辺境の先住民族の地域でも垣間見ることができ。例えばゴリン川流域のナーナイのところでは、ハバロフスク地方政府の財政支援によって、二〇〇八年にその中心村落コンドン村の学校に新校舎が建てられた。そこにはコンピュータルームも設置されて情報機器が完備されている。一九九〇年代の危機の時代に荒れた先住民族の村々における生活も、二〇〇〇年代後半に入ってから回復した。村の店の商品の品ぞろえも豊富になり、家には薄型テレビやビデオ、オーディオ製品、冷蔵庫、洗濯機など家電製品がそろえられ、人々の顔つきも穏やかになった。二〇〇九年のリーマンショックで中国やインド、ブラジルに水をあげられたが、BRICsと呼ばれた好調な経済の恩恵は先住民族にもある程度は及んでいる。

しかし、ロシアの好調な経済はあくまでも天然資源の切り売りに支えられている。資源開発は昨今の傾向として「持続

可能」な方法で行われる建前ではあるが、木材もエネルギー資源も成長著しい中国へ輸出する割合が高まっており、いつでも持続不可能な過剰搾取へ移行する危険がある。そして、先住民族の資源利用と対立することも当然多くなる。

アムール川流域の資源の一部（特に木材）は日本も輸入しており、われわれもその恩恵を受けている。先住民族の人々が長年にわたって培ってきたこの地域の資源利用方法を知り、地元の住民により多くの恩恵が行き渡るような開発を推し進めることが、アムール川流域の資源をより長く、より効果的に利用していくことにつながると考えられる。

注

(1) 現在、ロシア領内のアムール川流域（アムール州、ハバロフスク地方、沿海地方）で「先住民族」として公式に認められているのは、ナーナイ、ウリチ、オロチ、ウデヘ、ネギダール、エヴエンキ、ターズ、ニヅフの八民族である。人口は数百人（ターズ、オロチ、ネギダール）から一万余千人（ナーナイ）レベルで、いずれも移民系住民の人口と比べると圧倒的な少数派である。

(2) 例えば、契丹の遺、女真の金、朝鮮半島の高麗、平安中期以後の日本などをあげることができる。

(3) 先住民族の人々に特別枠の免許を発行する業務は、一九九〇年に結成された「ロシア北方先住民族協会」の州支部、地方支部、村の支部が担っている。